



現代ロシ...

テーマ：1930年代に成立したソ連体制の統治メカニズム

### ソ連時代の統治メカニズム

ソヴィエト

|

執行委員会

|

人民委員会議（ソヴナルコム）

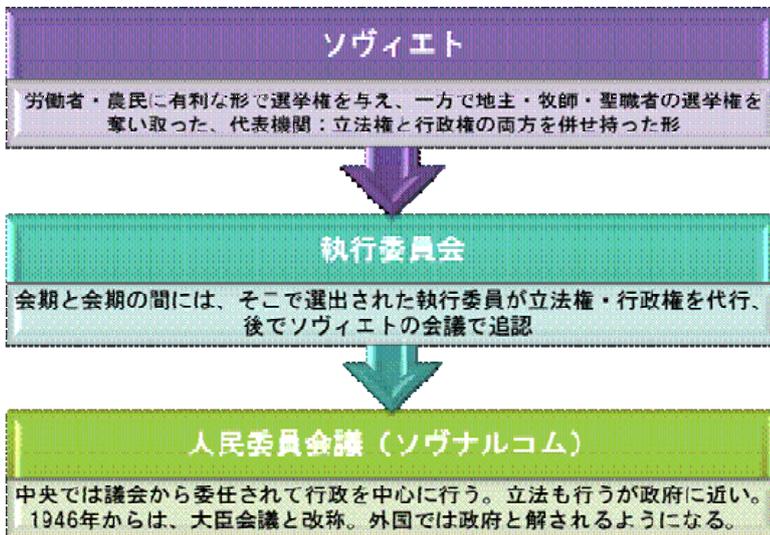
革命の中で、**どういう形で統治メカニズムが形成されるか、存在しているか。重要なのは、どこの国でも、どんな政治体制でも、自分たちの政治権力が物事を決めて実行させる過程では、実行させるだけのメカニズムがあるということ。メカニズムはどこにも存在する。上のやつはそういうメカニズムではなくて、いわゆる表向きの政治の仕組みを表したやつ。ソヴィエトが中心。ソヴィエトって言うのは、階級的な代表機関。**

公式の政治制度：ソヴィエトによる統治。階級的な代表機関で、立法権と行政権を持つ。会期の間は、そこで選出された執行委員が代行。中央では人民委員会議という政府（立法権も持つ）が代行。（後者は1946年から大臣会議へ改称）。

実際には、共産党が権力を独占し（他の政党の活動を禁止し）、さらにその共産党の中でも1921年に派閥活動の禁止が決定したことで、共産党主流派に強大な権限。共産党の統治機関化とともに、規模が増大し、党内上層部において専断的に事務を行なうスタッフ（上級の専断者）に権限の集中する傾向が生じた。その中心が、スターリン（共産党書記長としての在任期間は1922-1953）。

地主・牧師・聖職者とかには選挙権を与えられないで、労働者に有利な形で選挙権を与え、次に農民に有利な形で選挙権を与え、一方で権力を握っていた人々（人を雇っていたり土地も持っていて小作人を使っていたりしていた人々）の選挙権を奪い取って、そうした中でできた機関であるから、これは代表機関である。彼らが言うには、より民衆の意思を代弁している機関として、革命運動している中からでてくる。正式には1905年に出てくる。17年に、それをまねして、根付いてゆく。ドイツでもゲーテとして評議会というのが革命の中で生まれ、潰されるが、ロシアは生き延び、公式の政治制度の規範に座るようになる。

これはヨーロッパの議会のような形で機能するが、**議会よりは民衆の真意を代弁する**と考えられたので、**立法権と行政権の両方を併せ持った形で与えられた。つまり法律も作れるし、それを実行することもできた。権限分割をしない形でソヴィエトができる。ただし、議会なので代表者がずっと集まるわけには行かないので、会期と会期の間には、そこで選出された執行委員が立法権・行政権を代行して行った。行ったものに関しては、後でソヴィエトの会議で追認する。中央では人民委員会議が立法とか行政を代行、議会から委任されて行政を中心に行うので、まあ立法も行うけど、政府に近い。1946年からは、大臣会議と改称される、やがてそれが外国では政府と解されるようになることから、人民委員会議は政府に近いということがわかる。しかし、布告という形で立法権を行使することもできる。こうして考えられてきたのがソヴィエト政府。下から上まで、村ソヴィエト・市ソヴィエトというように、年に何回か何日か集まって討議する。でも、そこにずっと任せるわけにはいかないので、そこから執行委員を選んで、その人たちに行政、必要なら立法を行わせる。そういう形で行わせる。自分たちはヨーロッパよりも優れた、民意を代弁する機関を作り上げたのだから、ヨーロッパと同じような形で議会運営する必要はないという考え方が広まってできる。**



しかし、裏側には違うメカニズムがあった。なぜそうなるのかということが大事。なぜかというと、ソヴィエトは民意を代弁するので、労働者や兵士、農民が人民代の代表を送ってよいということになっていたはずなのだが、1918年の初めから国内が混乱し内戦状態になると、つぎつぎに他政党は活動停止に追い込まれる。結局ソヴィエトに選ぶことができるのは、共産党が無党派層であった。特に共産党にオンリーになっていく。一党支配国家ができてくる。だから、当然民意の代弁者といっても、結局共産党員しか選出されないで、問題が生じる。批判する人間に対しては弾圧（選ばれないようにする）し、他政党は活動停止にし、排除していった。その言い訳は自分たちが革命の理想を実現できるというものだが、実際には、自分たちが社会の中で多数派を占めていないという現実を認識したときには、他の政党と同等の形で競争できないということ。同等の形で競争すると不具合が生じ、自分たちが権力から追い払われるという恐れ。その二つが重なって、一党支配が生まれる。

立法、行政の両方を統括するソヴィエト。それは民意を代弁する機関から、一つの政党を代弁する機関に変わる。その後もう一回転換。ソヴィエトじゃなくて、ソヴィエトを裏から支配するという形で存在していた共産党の内部に変化が起こる。1921年にネップ政策とか新経済政策がとられたが、その時に分派闘争が禁止され、主流派以外の派閥の活動ができなくなる。党内の中央にいる人間が非常に強い権力を握ることになる。

#### ここから本論

こうして共産党内部に権力の構造ができてゆく。それを追うように、表向きにはソヴィエト権力が形成されてゆくが、これだけでは物事の処理ができない。だから、裏では何らかの物事を処理してゆくような権力機関の整備が行われていった。権力機関の整備がどのようにして行われたのかを考えることが重要。一つ目の重要な話は「党」。共産党

分派禁止→専従スタッフ⇄一般党員

党員には2種類の人、一人は党からお金をもらう人、もう一人は一般に党費を払って党員になっている人。実際はみんなこう。人が増えるほど、専断的に活動する人と、党費を払うだけの人が生まれる。党費を払うだけの人っていうのは、普通の労働者で党員だから党費を払っていて、一定程度国家のために尽くすのをやりたいそういう人たち。それに対して、党費をもらって事務活動をする人がいなければ大きな組織は動かない。大きな組織を裏から支えている人間が専従者。その中で特に上層部にいる人達は、日々よく党内の情報に接するので、一般党員に比べてはるかに事情通になる。事務取り扱いを行うだけで、こういう専従者は様々な権限を帯びていく。この見えない人が重要。徐々に大きな役割を果たすようになる。共産党も徐々に大きくなるが、人数が増えてゆくにつれて、もっと多くの専従者が事務的な活動を行わないと組織が動かないわけだから、役目は大きいね。彼らは共産党上層部と話をしながら、自分達の地位を高めてゆくという構造になっていた。これは一つのメカニズム。どこでも起こりうる。日本の政党も同じはず。党内で働いているうちに、どこかの代議士になる人もいる。途中から官僚を経由して議会の議員になる人もいるが、党内で力を付けて代議士になる人もいるのだ。選挙が十分に機能しないところでは、党内で活動する専従者の中から徐々に上がっていく。

まとめ共産党がソヴィエトの権力を独占してゆく。→その中でも主流派に権力が集中。→共産党が権力を振るう中で迫害してゆくの、事務取り扱いを行う専従者に権力が集中する。これらは全部レーニンの時代に起こった。

党内の上下層各層で指導者の役割をする人が出てきて、彼らが徐々に党内で上層部へ上がってゆくという構造ができてくると、どこの国でも起こる権力のメカニズムが働く。

全体でどこにも動かしているメカニズム、それがプリントの褒章（何らかの形で鉛玉

をあげる)、説得(給はあげられないが、理性に訴えて説得する)、制裁(制裁を加える)。どこの国でも、どんな政治体制でも、行わなければ、決定した事柄や政策は実行できないので必ずそういう形で人々を動かしてゆく。政治の正解では一方は他方を動かすというのが大事。そのメカニズムが大体この3つ。

1. 報償。 A. ノーメンクラトゥーラ制度。重要職務の一覧表  
B. 計画経済による財とサービスの中央管理制度。

褒章、お金が思いつく。あとは地位。会社で働くのはお金が欲しい、地位を上げたいと思うから。そういうものをあげれば、あげる人はもらう人を動かせる。結構どこでもある。人間が比較的気がつかないのは名誉欲。

名誉欲・・・日本は上下関係を重んじる国なので、言葉遣いが非常に重要である。その言葉遣いが目上の人の何をくすぐっているかと言うと、それが名誉欲である。国家からの勲章も褒章の一つ。

2. 説得。 A. 共産主義イデオロギー。人が人を支配しない社会、さらに「能力に応じて働き、必要に応じて分配する」共産主義社会の建設。  
B. 外敵の脅威。社会主義への敵意に備えて、急激な工業化が必要。  
C. 国外との交流の限定。マスメディアの管理。

説得、アメリカの大統領がテレビに出ていて、国民に訴える。必ずしもすぐに利益をすぐに上げるわけではないが、国民の理性に訴える。

制裁、どこの国でもある。最終的には、政治を動かすものは、暴力、力であることは認められている。その力の発動が多いか少ないか、力の発動に当たって、その行き過ぎを是正する措置は取られているか、それが重要なだけで、それを越えたところでは、どの国でもあるのだ。

しかし全部同じであるのではなく、いくつかの違いがある。

例えば、報償制度・・・**ノーメンクラトゥーラ制度:統治に役立つ重要な職務のリスト**  
革命によって権力を握った人というのは、政治の感覚が優れているので、少数で国家を統治することの難しさを知っている。だから少数で国家を統治する手段を考えるのは当然。社会全体を見ていて、**社会を動かすのに重要な役職があることに気がつく**。首相とか中央官庁の長とかだけでなく、最高裁・高等裁判事、マスコミの幹部ポストも重要なポスト、そんなポストをランキングして、最も重要なAランクの役職が、「第一のノーメンクラトゥーラ」という表の中に選ばれられる。1923年の時点で、ノーメンクラトゥーラという言葉がソ連の公式文書に始めて登場。隠されていたが80年代に存在が確認。23年の時点で、共産党中央委員会が任命に値する重要な職務は3500。これが第一のノーメンクラトゥーラ。非常に重要な役職。第二は1500。職務が全て列挙されたリストがある。これを作った人達は、権力構造を恐ろしいほど見抜いた人達であるといえる。なぜなら、この**ポストに乗っかっている職の中に、本来なら選挙で選ばれるはずの役職も含まれていた**ということである。ということは**選挙で選ばれるリストも、任命によってなされるリストに変えられている**ということ。共産党はそのポストが任命するポストも見抜いていた、重要だとみなしていた。やがて、各省庁のノーメンクラトゥーラができる(第三の...)。このようにして、行政・マスコミ・司法、選挙ポストといった全国を股にかけた形での職務全体が任命によってなされるようにする。こうして、**強大な人事権**が出来上がる。中国や北朝鮮ではどうなってるのか、先生は興味があるらしい。

この制度が明るみに出たのは、80年、ポーランドの自主労組連帯という運動がきっかけ。ノーメンクラトゥーラ制によって、労働組合の幹部が任命されない労働組合のこと。つまり、自分たち労働組合員が選んだ人間が労働組合のトップ(ワレサ)なって作った労働組合だからこそ自主労組。自分達の労働組合の代表を自分達で選んで作ることが、共産党システムの中では重大な抵抗であった。その過程でポーランドの中から、「自分達は実は代表を選ぶことができないのだ」ということで、制度が機能していることがわかってきて、明るみになる。現在では数をはっきりしてきてる。1926年時点で、第一1214、第二1289、第三1869であった。会社と同じような形で国家が見透かされていて、国家が、全体の任命制度というものを基に出来上がっていくという構造が出来上がる。これは少数派によって国家権力を握るには都合のいい、非常に良くできた制度。スターリンは見抜いていて、党が実は階層性があり、一般党員と専従員に分かれていて、専従者の中にも、ノーメンクラトゥーラに就く人間と、そうでない人間がいると、わかっていた。この言葉にも象徴される  
「党には3000-4000人からなる参謀本部に値する指導部が存在する。その下に、30000-40000人の将校団に値する人達がいる。さらにその下に10万単位で存在する下士官に値する人達がいる。」これは明らかにノーメンクラトゥーラを言ったものだ。

もう一つは**計画経済**が関係する。

財とサービスの分配→報償制度へ

**人を動かすにはやはり物やサービスを与えることが重要**である。しかし資本主義では、市場を通してあるので、財やサービスを完全に支配することは簡単にはできない。与えられた給料によって財やサービスを手に入れることになっているので、国家権力は財やサービスを支配して人々を動かすことは簡単にはできない。しかし、**計画経済は、財とサービスの分配までも含めて計画経済で行われているので、財とサービスの分配は中央権力が握っていることになる**。支配していた。だからどうなのという

と、財とサービスの分配が、報奨制度と結びつくことが可能になるということ。第一のノーメンクラトゥーラの人の子供が通う学校のサービスだとか、第一のノーメンクラトゥーラの人がいく病院のサービスだとか。これは市場経済ではできないような形で存在している。ということは、本来は別の形で存在していた計画経済を利用して、褒章制度を機能させることが可能になる。中央の権力は、ある人には財を、ある人にはサービスを与えたりとできるわけだ。そうすると、ある程度権力の命令に従ってかつしたほうが良いと誘導されるのは当然であって、これこそ完全なメカニズムである。これは体制が崩壊してしまったからこそよくわかる。

良く似た制度を作っていた中国は、78年から徐々に経済を変えていって、市場経済を導入していった。権力だけは中国共産党が保持するという形をとっている。共産党が自分達の意向に従って人々を動かす力は、毛沢東のころの中国共産党に比べると明らかに弱まっているに違いない。全部がなくなるとは思えないが、それでも、少しずつ、中央権力のメカニズムを移しつつあることは確かで、これは見物である。非常に微妙な形で左右している。原型となっているのは明らかに2つの成分、報奨制度として存在しているのは、共産党が持っている人事制度、そして財とサービスをコントロールする力である。

本来なら権力構造は、報奨制度が一番機能しているはずなのだが、ある程度の権力関係がなければ秩序はないので、秩序を守るためにはある程度の権力関係は必要で、そういう制度の中で最も簡単なのは、様々な褒章を持っている人間が並び立っているという構造を作るべきなんだけど、なかなかそうはならない。特に権力関係が固定化されると、こういう制度が非常に進んでいく。

説得、共産党の中では共産主義者社会を作るというユートピア、夢が人々を掻き立てる。夢が人々を駆り立てるといえることがいかに重要かは、会社の社長さんが一番知っている。入社式、セレモニーとかで社長の言ってることの大半は夢、目標。夢を描くことができるかによって人々は動いてゆく。アメリカのブッシュ政権の「世界中に民主主義を広めるんだ」という夢には、あきらかにアメリカの重要役職の人を掻き立てて、お金も地位ももらうわけではないんだけど、一生懸命その実現を夢見て活動した人がいたはずだ。夢を持つことを忘れた国が、夢を持って動いている国に、「無駄だ」と言う。しかし通用しないぐらい深い「夢」がある。そういう深い夢を抱かせることのできる人こそがその時代のリーダーになる。どの時代にも夢を作り出す人がいることが重要で、その夢は権力関係を作ってゆく。夢が権力関係を作ってゆくことを忘れてはならない。ホリエモンが動くとも人々も動いて、そしてそれにしがたって人々はお金を出し、労力を出してゆくという構造は、明らかに彼の元に権力関係が生まれていた証拠。彼のやりたい方向に人々が動いていて、彼を偶像化した人々は彼と共に夢を共有してただけなのだ。勝手に夢を見ていただけ。しかしこれは権力関係をなす重要な要素であることを示している。共産党社会では、みんな「豊かになれるんだ！人が人を支配しないんだ」という社会主義が生まれる！労力のある人が働いて、それで得た財は必要な人が集まって平等に分け合う、そんな共産主義社会がくるんだ！という夢に掻き立てられた。夢を使うことによって人々を説得するという行為が、権力のメカニズムにおいて非常に重要な形になる。その他に、外の敵が社会主義を恨んでいるから攻めて来るぞ、という脅しを使うこともある、だから急いで工業化しなければならない、工業化するにあたっては農業はある程度犠牲にならなければならない、一気に工業化してしまえば苦しみは短い、その次に平和が訪れる、という説得。こういう形で説得の技術が発達してゆく。この説得の技術を支えるメカニズムが、国外との関係の閉鎖、限定。日本語で言うと「鎖国体制」。鎖国体制は説得するのに非常に便利。徳川幕府は、キリスト教の影響を排除するために、鎖国体制を敷いて、自分達のイデオロギーだけが日本全体に広まることを推進し、異なる思想・イデオロギー・宗教を持つ人達を弾圧した。つまり、夢を語るためには、夢が嘘だ、別の夢があると言う人は邪魔であるのだ。だから、「ユートピアは孤島に存在する。」周りとコミュニケーションを限定化された断絶した孤島において初めてユートピアが成立する、ということはトマス・モアの時代からずっと明らかだった。コミュニケーションを限定化して、初めて自分達の価値観、イデオロギーが蔓延した社会を作ることができる。だから、ソ連体制の中で作られた鉄のカーテンとマスメディアの管理は、自分達の言葉でもって説得するための最低限の、そして最も重要なメカニズム。韓国と北朝鮮実験的に鉄道結ばれる。これは閉鎖された社会を変えてゆく一本になるのか、変えていっているということを見せるだけの宣伝にとどまるのか、すごく微妙だが、非常に重要な要素である。だから世界中のマスメディアがこぞって報道しているのは、こういう意味がある。

意外なほど多数の人が、自分の国のイデオロギーを信じている。自国が崩壊してしまっただけに、それが間違っていたと聞いてすごく驚く。普通の人達って、外国から流れて出てくる情報に関してかなり聞く耳を持たないという形で行動している。閉鎖社会、マスメディアの管理、その下での説得が非常に重要な役割を果たす。

3. 制裁。 たんに報償の裏返しではない。たとえば以下の歴史家のまとめ。

「研究史が証明しているように、1932-33年にスターリン指導部は飢饉について沈黙し、海外に穀物を輸出しつづけ、ソ連の飢えた人々を援助しようという国際世論の試みを、彼らの政治的方針にもとづいて、無視しつづけた。飢饉の事実を認めることは、スターリンとその側近が選り取った国の近代化のモデルが破産したことを認めるに等しかった。それは反対派を壊滅させ体制を強化しなければならないという条件の下ではありえなかった…1932-1933年に、スターリン体制は、農民がコルホーズで良心的に働きたがらないから、集団化に抵抗するからという理由で農民を飢饉によって罰した」。奥田央編『20世紀ロシア農民史』所収のコンドラシン論文 502～503。

「社会主義建設のために尽くした自国民に対して国家がふるった暴力は、世紀の初頭のロシアにおける国家の暴力と、規模において比較にならないものであった。1937年-38年の公式資料を受けいれたとしても、1年間に34万846人、つまり毎日934人が銃殺されたことになる。これは(1906年-11年まで首相を務めた)ストルイピンの時代における年間の人数とほぼ同じであった。」イリーナ=バヴロヴァ『権力のメカニズムとスターリンの社会主義建設』335

\*ソルジェニツィンの『収容所群島』(新潮文庫)なども参照。

啓政期とレベルの異なる国民・国家管理の進行。それに伴って強制メカニズムが発達。上記の1. 2. 3はソ連期全体にあてはまるが、スターリン期とそれ以降の時期では、イデオロギーの有用性や制裁の規模で大きな変化。

**制裁、単に褒章の裏返しではないということが重要。レジュメ見て。いかにすさまじい制裁が行われていたかがわかる。1932年の100万人単位の人間が死んだ飢饉が「処罰」として考えられると書いてある、つまり制裁として機能したということ。100万人の人間が飢饉で死んでも、政治体制には何の影響もない。現在でも、数十万人単位の人がアフリカで故郷を追われて逃げ出している人はたくさんいるが、それでも政治体制には何の影響もない。制裁としての機能は果たす。恐ろしいから言う事は聞く。革命前に行われた悪名高い処罰と比べても、ソ連体制において行われた処罰は桁が違う。こうしてわかるとおり、褒章・説得・制裁という機能があって、これはどの国もこの3つのメカニズムを動かして、どの国でも独特のメカニズムを発生させてゆく。説得意のメカニズムに儒教の制度を使うものもある。目上のいうことを聞け、喧嘩をするな、物事は荒立ててはいけないなどの、過去から存在する価値観を用いて説得するのはよくある話。それはその国の価値観のなかに存在しているものを、権力者たちは巧みに取り出してきてみんなに訴える、なるほどそうかと思わせる。これからわかるとおりに、メカニズムは独特な形で発達していて今ではいくらかもある。こういう形で存在している。これを他の地域に応用する。メカニズムが弱くなっていれば、それは政治体制が自分のことを聞かせる能力が減っているということになる。以上！！**

貼り付け元 <<file:///I:/授業ノート2年生/現代ロシア論/現代ロシア論5-17.docx>>